

資 料

ボランティアセンターの創設と活動の現状

富田 恵子・大山さく子・南條 正人

The Establishment of a Volunteer Center and the Current Activity

TOMITA Keiko, OHYAMA Sakuko and NANJO Masato

Sendai College in Miyagi, Japan established the Volunteer Center in April 2003. The purposes for starting this program are for university students to enrich their social experiences, to develop their leadership skills and to help deepen their understanding of human experiences. It is the university's hope that the center serves a role expected by the community as well.

The students volunteers acquire curricular units after one year of their participation. One year after opening the center, out of 1,797 total student population, 42 acquired the units.

The author conducted a survey to examine students' participation and their activities at the volunteer center and to analyze the results for improving the program.

The result indicated that there are several problems including publicity and giving information about the program.

Key words : Volunteercenter Volunteer activities Student Census of consciousness

1 研究の目的と方法

今日、地域社会に開かれた大学の役割が求められている。一方地域社会では、大学を有効な社会資源として位置づけ、さまざまな活動に学生たちが参加することを期待している。

平成15年4月に、本学では学生たちの社会体験と主体性・人間性を深め、豊かにする教育的効果とともに、地域社会に開かれた期待される大学の役割の一環として、「ボランティアセンター」を創設した。ボランティアセンターは、学生と地域社会を結ぶ架け橋の役割を担う。

その創設に至る経緯とその後1年間のとりくみの現状を、学生のボランティア活動への参加の状況と特にボランティアセンター運営に関わる学生のとりくみを明らかにし、今後の本学のボランティアセンターのあるべき方向に資することを研究の目的とする。

研究の方法としては、本学にボランティアセンターが創設された経緯をたどり、準備段階からスタート時点、スタート後の状況と運営体制、特にそこに学生たちがどのように関わっているかなど活動の現状を明らかにし分析する。

また、ボランティアセンターが活動を始めて、学生たちのボランティア活動の実践の状況を、活動先の現状や学生へのアンケート調査を集約・分析し、課題を探る。

2 研究の成果

- 1) ボランティアセンターの創設・運営の状況
(1) 創設の経緯—学生支援センターの1部門として

第1回全国障害者スポーツ大会（2001年10月・宮城県で開催）に介助ボランティアとして参加した学生たち（健康福祉学科約

300名)からの要請に応え、本学にボランティアセンターの創設を意図した。

その実現のために外部の研究費を申請した。「私立大学教育研究高度化推進特別補助金」である。2001年度に申請し、2002年度から3ヵ年計画で補助金が認められた。早速2002年度からボランティアセンター立ち上げの準備が始まった。学内にボランティアセンターの拠点となる場所の提供を依頼したところ、これが呼び水となって広いスペース(1教室)が提供され、新しく「学生支援センター」が発足した。

学生支援センターには4部門があり、聴覚障害学生支援、留学生支援、ボランティア活動支援、学外交流支援の1部門として、ボランティアセンターが位置づけられ、発足したのである。

短い準備期間で慌ただしかったが、ハード面・ソフト面の準備を整えて2003年度のスタートと同時に発足し、学生のボランティア活動が「履修単位」としても認定される仕組みとなった。

(2) 運営の現状—学生を中心としたとりくみの実践

ボランティアセンターの運営の中心に、公募により学内から集まった15人の「学生スタッフ」を位置づけた。体育学科・健康福祉学科の1年生から4年生まで多彩なメンバーである。総務、広報、渉外、研修に分かれて役割を担い、広報は情報紙「ぼらんて」を毎月の月初めに発行をしている。

学生スタッフはボランティアセンターの羅針盤であり、センターと学生たちと地域社会を結ぶ潤滑油となった。月1回夕方からスタッフミーティングを開き、情報交換とともに課題提起・解決にむけて検討する。

学生スタッフの他に「ボランティアコーディネーター」が窓口に座り、地域社会からのボランティア要請を受けて地域社会と学生

たちを結び、具体的な学生のボランティア活動の相談・支援にあたる。月曜日—金曜日の午前9時30分—午後5時まで3人のコーディネーターがローテーションを組んで相互の連絡を図りながら業務を推進している。非常勤職員の扱いである。

① コーディネーターの状況

地域のボランティア需要に対し、学生のボランティア活動供給のパイプ役・相談役として、専従職員(コーディネーター)が必要不可欠である。仙台大学ボランティアセンターでは、3名が交代制で平日の5日間、午前9:30から午後5:00までの間、カウンターに配置されている。

ボランティアを必要としている地域の個人・グループ、施設・団体等がボランティア活動自体に何を求めているのか、ボランティア活動者である本学の学生にどのようなことを求めているのかを把握し、受け入れること。また、学生が行ってみたいボランティア活動を把握し、学生がボランティア活動を行いやすい環境を整えるのもコーディネーターの大きな役割である。この環境を整える上で重要なことは、地域との連携を図ることであり、地域に開かれた大学を目指す仙台大学にとって大切なことである。そのような意味でも、コーディネーターが中核的な存在としてコーディネートしていくことがボランティアセンターには重要なことである。

具体的には、電話・FAX・メールによる連絡調整、カウンターでの相談・接待、掲示板による学生への情報提供、研修講座の開催、パソコンなどによる事務整理等、多岐にわたる業務を行っている。

② 学生スタッフの状況と役割(担当部)

(ア) ボランティアセンターにおける学生スタッフの位置づけ・役割

学生スタッフは、現在 20 名（平成 16 年 3 月）で、男性 11 名（2 年生 2 名、3 年生 6 名、4 年生 3 名）、女性 9 名（1 年生 4 名、2 年生 1 名、3 年生 3 名、4 年生 1 名）である。平成 15 年 4 月オリエンテーション直後には、男性 6 名、女性 6 名の 12 名であったが、7 月の前期終了時には、1 年生の女子と 3 年生男子が 5 名増え計 17 名となった。さらに、後期に入り、今まで 2 年生のスタッフがいないが、男子 2 名、女子 1 名の 3 名が加わった（表 1）。

学生スタッフは、広報部・総務部・渉外部・研修部と 4 つの担当部に分かれ、それぞれが責任を持ち、役割を担っている。

広報部は、学内における広報活動全般を担当している。具体的には、学生ボランティア募集及び募集ポスターの作成やボランティアセンター情報誌「ぼらんて」（毎月発行）の作成などを担当している。

総務部は、コーディネーター業務のサポートや、パソコン打ち込み、資料作成、会議等の記録を行っている。

渉外部は、外部団体との交渉・情報交換等を担当、具体的には、外部団体の主催する会議への出席やボランティア活動先の依頼内容等の確認を行っている。

研修部は、ボランティア活動研修講座等の運営を行っている。

広報部 7 名 総務部 6 名 渉外部 3 名
研修部 4 名（平成 16 年 3 月現在）

(イ) スタッフ・ミーティング

ボランティアセンターでは、コーディネーター、学生スタッフとの連絡・調整のため、毎月 1 回「スタッフ・ミーティング」を行っている。各担当部署が、司会・進行を務め、それぞれ担当部署毎の 1 ケ月間の活動状況についての報告や依頼先の状況と学生の派遣状況、また、ボランティア講習会の準備・打ち合わせなどについて話し合いがもたれている。

2) 学生のボランティア活動に対する意識調査

(1) 調査目的

この調査は、仙台大学に入学・在籍する学生のボランティア活動に対する意識や活動の有無を把握し、ボランティア活動の今後の支援と、それを実施するボランティアセンターの活動を推進するための参考資料とすることを目的とする。

(2) 調査方法

調査対象は、仙台大学 3 学科（体育学科、健康福祉学科、運動栄養学科）の全学生を対象に実施、調査期間は平成 15 年 4 月 7 日から 8 日の入学式後の学科別、学年別のオリエンテーション時に調査票を配布、回収した。調査項目は、①今までに、ボランティア活動をしたことがあるか、②その活動内容・活動対象、③今後、ボランティア活動を行ってみたいか、④その活動内容・活動対象である。また、⑤ボランティア活動をしたくないと答えた学生には、その理由を尋ねた。

体育学科 813 名、健康福祉学科 315 名、

表 1 学生スタッフ

		男	女	計
4月オリエンテーション直後	1年	0	1	1
	2年	0	0	0
	3年	4	4	8
	4年	2	1	3
	計	6	6	12
前期終了時点	1年	0	4	4
	2年	0	0	0
	3年	6	3	9
	4年	3	1	4
	計	9	8	17
後期終了時点	1年	0	4	4
	2年	2	1	3
	3年	6	3	9
	4年	3	1	4
	計	11	9	20

運動栄養学科 47 名の 1,175 名から回答を得た。

全学生数 1,821 名 (H15 年 4 月現在) に対する回収率は 64.5% であった。

(3) 調査結果の概要

①ボランティア活動経験の有無について

「今までに、ボランティア活動をしたことがありますか?」という質問では、「はい」と回答した体育学科の学生は全学年とも 50% 前後であった。一方、健康福祉学科では、経験したことがある学生が圧倒的に多い結果となった。これらのことから、体育学科の学生

は、所属するスポーツの部活動に専念している学生が多いことがこのような結果になったと窺える。また、健康福祉学科の学生においては、学年が上がるにつれて、経験が有る学生が増えている。このことから、ボランティア活動実践に積極的に参加することが、将来福祉の現場に就職してから役に立つという意識の表れだといえる (表 2 図 1) (表 3 図 2)。

②今後のボランティア活動について

②- 1 今後のボランティア活動希望

「今後、ボランティア活動を行ってみたいか?」という質問結果では、「思う」と回答し

表 2 今までに、ボランティア活動をしたことがありますか?

	経験有		経験無	
	n	%	n	%
体育1年	108	43.0	143	57.0
体育2年	104	42.6	140	57.4
体育3年	113	53.3	99	46.7
体育4年	63	59.4	43	40.6

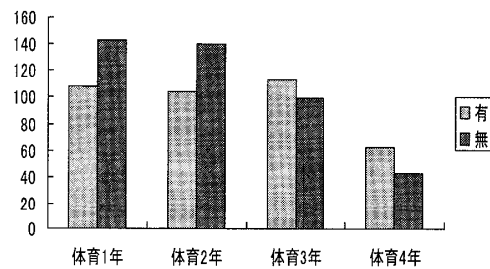


図 1 体育学科

表 3 今までに、ボランティア活動をしたことがありますか?

	経験有		経験無	
	n	%	n	%
健福1年	67	58.3	48	41.7
健福2年	49	62.8	29	37.2
健福3年	67	79.8	17	20.2
健福4年	35	92.1	3	7.9

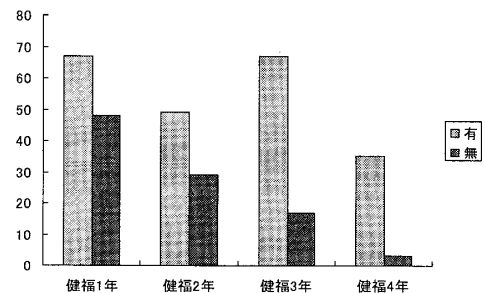


図 2 健康福祉学科

表 4 今後、ボランティア活動を行ってみたいか?

	思う		どちらともいえない		思わない	
	n	%	n	%	n	%
体育1年	80	31.9	122	48.6	49	19.5
体育2年	84	34.4	107	43.9	53	21.7
体育3年	79	37.3	95	44.8	38	17.9
体育4年	46	43.4	45	42.4	15	14.2

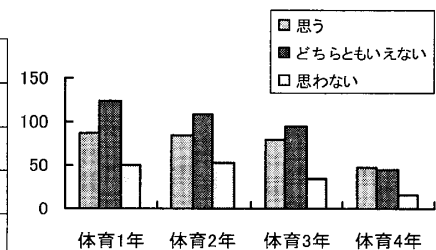


図 3 体育学科

た体育学科の学生は、30%から40%にとどまった。一方、健康福祉学科においては、全学年とも60%を超える結果となり、今後のボランティア活動に意欲的なことがわかった(表4図3)(表5図4)。

両学科を性別で比較してみると、「思う」と答えた学生は体育学科の男子学生が28.5%、女子学生はそれよりも高く49.4%、健康福祉学科男子学生は56.6%、女子学生はそれよりも高く82.7%であり、学科と性別の違いが

顕著に表れている(表6図5)。

反対に、「思わない」と回答した体育学科の学生は全学年とも10%以上に達し、健康福祉学科においては、5%程度であった。これらの学生には、別途その理由を求めているが、ボランティア活動を行いたくてもできない状況もあり、どのようにすれば活動ができるのかを考え、ボランティア活動に参加できる環境をつくっていくことが重要である。

表5 今後、ボランティア活動を行ってみたいか？

	思う		どちらともいえない		思わない	
	n	%	n	%	n	%
健福1年	81	68.7	32	27.1	5	4.2
健福2年	45	64.3	21	30.0	4	5.7
健福3年	65	73.0	16	18.0	8	9.0
健福4年	33	86.9	4	10.5	1	2.6

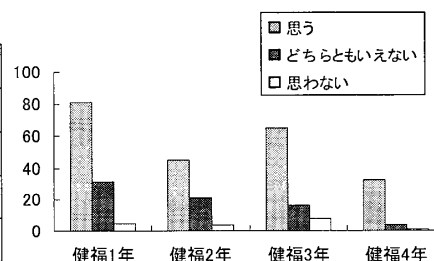


図4 健康福祉学科

表6 今後ボランティア活動を行ってみたいか
-学科別・性別-

	思う	どちらとも	思わない
体育 男	28.5	49.0	22.5
体育 女	49.4	37.7	8.9
健福 男	56.6	34.8	9.6
健福 女	82.7	14.5	2.8

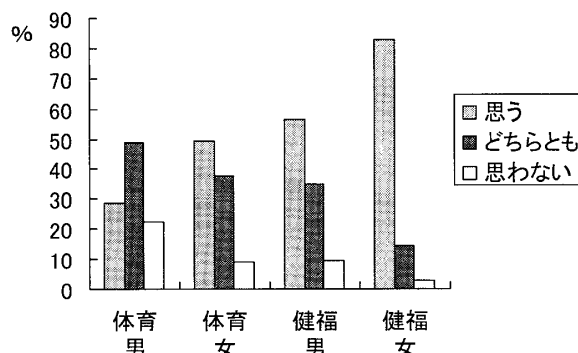


図5 今後ボランティア活動を行ってみたいか
-学科別・性別-

表7 今後してみたい活動・内容(複数回答)
-体育学科-

	%	定数
スポーツ	65.2	530
レクリエーション	26.8	218
生活介助	4.2	34
話し相手	13.4	109
作業補助	7.9	64
イベント	24.0	195
文化活動	5.4	44
環境保護	11.1	90

表8 今後してみたい活動・内容(複数回答)
-健康福祉学科-

	%	定数
スポーツ	58.1	183
レクリエーション	42.2	133
生活介助	19.0	60
話し相手	11.0	80
作業補助	17.8	56
イベント	38.7	122
文化活動	11.4	36
環境保護	17.8	56

②-2 今後、してみたい活動（活動内容）
「今後、どのようなボランティア活動をしてみたいと思いますか？」という質問に関しての結果では、全学科（体育学科、健康福祉学科、運動栄養学科）とも「スポーツ」が圧倒的に高率を占め、その後に「レクリエーション」「イベント」という順になった。このことは、体育学部という学部の特性からきていると言えるだろう。また、「イベント」に関しては、断続的でたくさん交流することが可能であるという点から、気軽なボランティア活動として人気があると考えられる（表7、表8、表9）。

3学科とも「今後してみたい活動・内容」として高率を示した「スポーツ」であるが、体育学科と運動栄養学科は両学科とも41%であるが、健康福祉学科は25%でかなり下回る。「レクリエーション」は3学科とも17・18%でほぼ同率である。

「生活介助」や「話し相手」のような日常生活を支援する活動を希望するのは、健康福祉

学科が多くて、特に「生活介助」は8.3%で他学科の2・3倍を示し、学科の特徴を表している。

②-3 今後、してみたい活動（対象）

「今後、どのような対象者にボランティア活動をしてみたいと思いますか？」という質問に関しての結果では、全学科（体育学科、健康福祉学科、運動栄養学科）とも「児童」が1番多いことがわかった。「障害児・者」がこれに続く（表10、表11、表12）。

③ボランティア活動に参加しない学生について

「今後、ボランティア活動を行ってみたいか？」という質問に対して、「思わない」と回答した学生理由として、体育学科と運動栄養学科の学生では、「部活が忙しい」が最も多い結果であった。健康福祉学科においては、「アルバイト」が多いという回答結果が得られた。

この質問の回答結果において、注目すべき点は、「活動のきっかけがない」から活動しないという理由である。活動のきっかけがないというのは、個人の都合、自分の感情と違い、行いたい意志はあるが参加するための環境が

表9 今後してみたい活動・内容（複数回答）
-運動栄養学科-

	%	定数
スポーツ	74.5	35
レクリエーション	34.0	16
生活介助	6.4	3
話し相手	14.9	7
作業補助	10.6	5
イベント	19.1	9
文化活動	12.8	6
環境保護	8.5	4

表10 今後してみたい活動・対象（複数回答）
-体育学科-

	%	定数
障害児・者	20.8	137
高齢者	20.8	137
児童	68.4	450
その他	4.1	27

表11 今後してみたい活動・対象（複数回答）
-健康福祉学科-

	%	定数
障害児・者	42.1	125
高齢者	45.1	134
児童	57.2	170
その他	2.7	8

表12 今後してみたい活動・対象（複数回答）
-運動栄養学科-

	%	定数
障害児・者	25.6	11
高齢者	34.9	15
児童	34.9	15
その他	4.7	2

整っていないということが言える。このことから、ボランティア活動に参加するためには、参加するための環境づくりとして、初心者向け実践活動の開催や周囲の人達との関わり合

いが重要であることが窺える（表 13、表 14、表 15）。

3) ボランティアセンターにおけるボランティア活動の現状

(1) ボランティアの登録数

平成 15 年 4 月からのボランティア登録数は全学生 1,797 名のうち 209 名（11.6%）で、男子は 1,203 名のうち 77 名（6.4%）、女子は 594 名のうち 132 名（22.2%）であった。

学科毎の登録者数について、各学科の学生数でみると、体育学科では、1,243 名のうち 70 名（5.6%）が登録、男子 935 名のうち

表 13 参加しない理由（複数回答）
－体育学科－

	%	定数
部活が忙しい	55.5	86
サークルが忙しい	3.9	6
アルバイト	15.5	24
活動に興味が無い	20.6	32
福祉に興味が無い	11.0	17
活動のきっかけがない	7.7	12
その他	6.5	10

表 14 参加しない理由（複数回答）
－健康福祉学科－

	%	定数
部活が忙しい	33.3	6
サークルが忙しい	16.7	3
アルバイト	38.9	7
活動に興味が無い	22.2	4
福祉に興味が無い	0	0
活動のきっかけがない	11.1	2
その他	27.8	5

表 15 参加しない理由（複数回答）
－運動栄養学科－

	%	定数
部活が忙しい	50.0	2
サークルが忙しい	0	0
アルバイト	25.0	1
活動に興味が無い	25.0	1
福祉に興味が無い	0	0
活動のきっかけがない	0	0
その他	0	0

表 16 学科別 登録・受講・単位取得者数

		男		女		計	
		人数	%	人数	%	人数	%
体 育	学 生 数	935 ¹⁾	75.2%	308 ¹⁾	24.8%	1,243 ¹⁾	100.0%
	登録者数	41	4.4	29	9.4	70	5.6
	受講者数	11	26.8	15	51.7	26	37.1
	取得者数	5	45.5	5	33.3	10	38.5
健康福祉	学 生 数	248	49.3	255	50.7	503	100.0
	登録者数	32	12.9	96	37.7	128	25.5
	受講者数	13	40.6	53	55.2	66	51.6
	取得者数	6	46.2	25	47.2	31	47.0
運動栄養	学 生 数	20	39.2	31	60.8	51	100.0
	登録者数	4	20.0	7	22.6	11	21.6
	受講者数	1	25.0	4	57.1	5	45.5
	取得者数	0	0.0	1	25.0	1	20.0
計	学 生 数	1,203	66.9	594	33.1	1,797	100.0
	登録者数	77	6.4	132	22.2	209	11.6
	受講者数	25	32.5	72	54.6	97	46.4
	取得者数	11	44.0	31	43.1	42	43.3

注) ※ 1 男女別割合を示す ※ 2 登録者数は学生数の登録割合を示す ※ 3 受講者数は登録者数の受講割合を示す
※ 4 取得者数は受講者数の単位取得割合を示す

41名(4.4%)、女子308名のうち29名(9.4%)が登録を行った。健康福祉学科では、503名のうち128名(25.4%)が登録、男子248名のうち32名(12.9%)、女子255名のうち96名(37.6%)であった。運動栄養学科では、51名のうち11名(21.6%)が登録、男子20名のうち4名(20.0%)、女子31名のうち7名(22.6%)であった(表16)。

(2) ボランティア研修講座の受講者数と単位取得者数

ボランティア活動を行うためには、ボランティアの登録をし、ボランティア研修講座(1回・90分)を受講することが義務付けられている。

その研修講座の受講者数は、ボランティア登録者209名のうち男子25名(32.5%)、女子72名(54.5%)の合計97名(46.4%)であった。

学科毎の受講者数について、各学科の登録者数でみると、体育学科では、70名のうち26名(37.1%)が受講、男子41名のうち11名(26.8%)、女子29名のうち15名(51.7%)であった。健康福祉学科では、128名のうち66名(51.6%)が受講、男子32名のうち13名(40.6%)、女子96名のうち53名(55.2%)であった。運動栄養学科では、11名のうち5名が受講、男子4名のうち1名(25.0%)、女子7名のうち4名(57.1%)であった。

研修講座の受講者は、ボランティア登録者の半数であった。また、3学科とも女子の方が5割を超え、男子より多かった。

この研修講座を受講し、10回以上のボランティア活動を実践した学生は、「ボランティア活動実践」の単位を取得できるが、今年度の単位取得者数は、研修講座を受講した学生97名のうち42名(43.3%)であった。

単位取得者は、研修講座の受講者に対し半数に満たなかった。

学科毎の単位取得者数は、各学科の受講者数でみると、体育学科では、26名のうち10名(38.5%)が取得、男子11名のうち5名(45.5%)、女子15名のうち5名(33.3%)であった。健康福祉学科では、66名のうち31名(47.0%)が取得、男子13名のうち6名(46.2%)、女子53名のうち25名(47.2%)であった。運動栄養学科では、5名のうち1名(20.0%)が取得、女子の1名(25.0%)であった(表16)。

単位取得を達成することは、目的意識を持ってボランティア活動に参加しないと難しいといえる。単位を取得した42名のうち、健康福祉学科の学生が31名(74%)を占め、評価に値する。

(3) ボランティア活動実績

①活動依頼先状況

平成15年度1年間の活動依頼先は、117カ所であった。

表17 対象別

対象者	件数	割合
障害者・児	43	36.8%
高齢者	21	17.9
児童	27	23.1
その他	26	22.2
合計	117	100.0

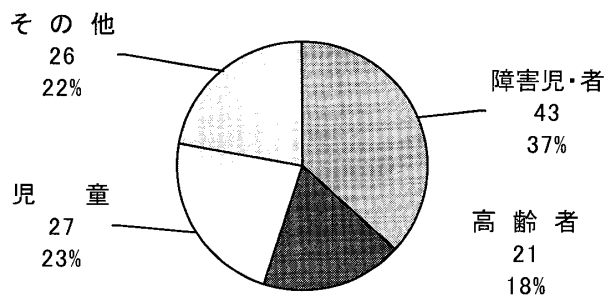


図6 対象別

①-1 対象別

活動依頼先 117 カ所の内、障害児・者が 43 件 (36.8%) を占め、以下、児童 27 件 (23.1%)、高齢者 21 件 (17.9%)、その他 26 件 (22.2%) となっており、障害児・者が 4 割を占め、一番多い (表 17・図 6)。

①-2 活動内容別

活動依頼先 117 件の内、生活支援が一番多く 42 件 (35.9%) を占め、以下、スポーツ 18 件 (15.4%)、レクリエーション活動 15 件 (12.8%)、身体介助 13 件 (11.1%)、文化活動 13 件 (11.1%)、環境や作業活動等のその他の活動が 16 件 (13.7%) であった。

表 18 活動内容別

対象者	件数	割合
生活支援	42	35.9%
身体介助	13	11.1
スポーツ	18	15.4
レクリエーション活動	15	12.8
文化活動	13	11.1
環境活動	2	1.7
作業活動	3	2.6
その他	11	9.4
合計	117	100.0

生活支援及び身体介助を合計すると 55 件 (47.0%) を占めており、生活に密着した内容の依頼が多い。また、スポーツやレクリエーションも約 3 割を占めており、活動内容に大きな二面性が窺える。

これら活動内容を見ると、本学が体育学部 (体育学科・健康福祉学科) であることの特徴を生かした依頼が多いことがわかる (表 18・図 7)。

①-3 運営体制別

活動依頼先 117 件の内、行政が 37 件 (31.6%) を占め、以下、社会福祉法人 34 件 (29.1%)、在宅 (個人) 5 件 (4.3%)、その他 41 件 (35.0%) となっており、行政

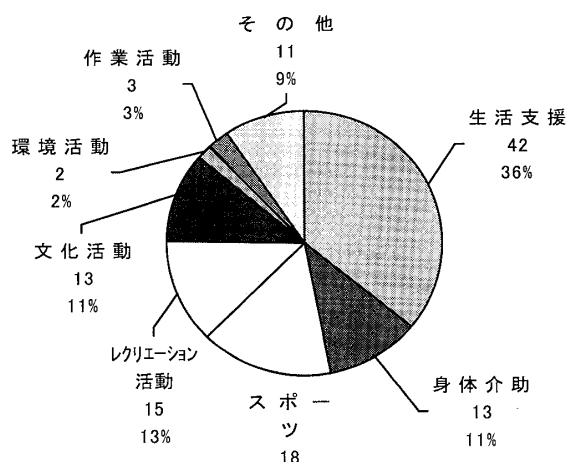


図 7 活動内容別

表 19 運営体制別

対象者	件数	割合
社会福祉法人	34	29.1%
在宅 (個人)	5	4.3
行政	37	31.6
その他	41	35.0
合計	117	100.0

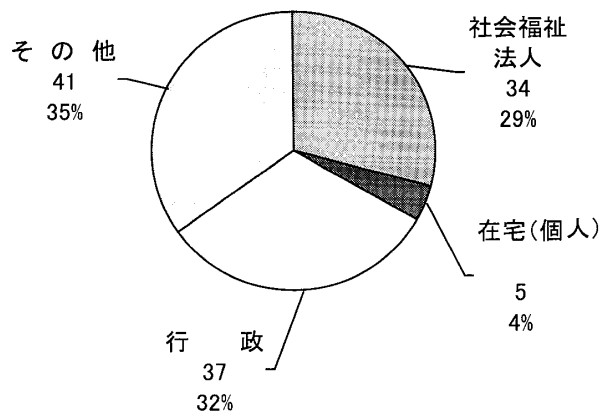


図 8 運営体制別

では、小学校・中学校・高校または、養護学校が多かった。社会福祉法人では、特別養護老人ホームや老人保健施設が多く、その他では、NPO 法人やボランティアサークル、実行委員会などからの依頼があり、多岐にわたる依頼先の状況からも本学への期待の大きさが窺える（表 19・図 8）。

②学生のボランティア参加状況

平成 15 年度 1 年間の依頼件総数は 184 件（依頼先総数 117 カ所）であった。また、学生のボランティア活動者数はのべで 592 名

であった。

②-1 対象別

依頼件総数 184 件の内、障害児・者が 72 件（52.2%）を占め、以下、児童 31 件（22.5%）、高齢者 19 件（13.8%）、その他 16 件（11.5%）となっており、障害児・者が 5 割を占めた（表 20・図 9）。

※恒常活動も 1 件として集計している。

②-2 対象別活動者数

学生のボランティア活動者数はのべで

表 20 対象別

対象者	件数	割合
障害児・者	72	52.2%
高齢者	19	13.8
児童	31	22.5
その他	16	11.5
合計	138	100.0

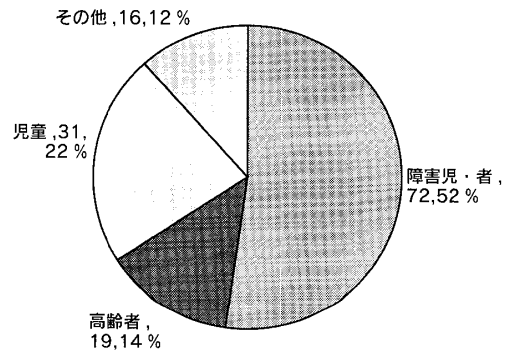


図 9 対象別

表 21 ボランティア活動者数

対象者	活動数	割合
障害児・者	349	59.0%
高齢者	60	10.1
児童	106	17.9
その他	77	13.0
合計	592	100.0

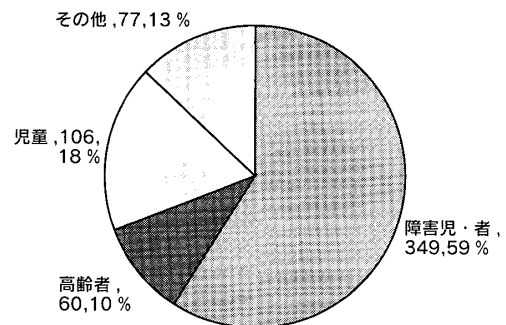


図 10 活動者数

表 22 依頼お断り件数

対象者	お断り	割合
障害児・者	13	28.3%
高齢者	10	21.7
児童	9	19.6
その他	14	30.4
合計	46	100.0

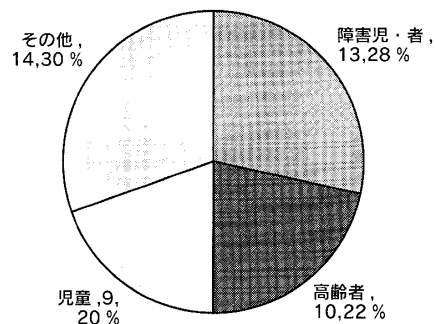


図 11 お断り件数

592名であった。その内訳は、障害児・者 349名 (59.0%) の約6割を占め、以下、児童 106名 (17.9%)、その他 77名 (13.0%)、高齢者 60名 (10.1%) となっている (表 21・図 10)。

②-3 お断り件数

依頼を受け、学生にボランティア募集を行ったが、集まらなかった件数が46件であった。その原因として考えられるのは、ボランティア依頼曜日が平日であり、学生の講義と重なるケースが多くあった (表 22・図 11)。

(4) 学生の活動体験から

15年度のボランティア活動実践を終了した学生が42名であったことは先に記したが、その学生には終了にあたって4項目にわたる簡単なレポートの提出を課している。①ボランティア活動の感想・まとめ、②活動の中で感銘を受けた事例について、③今後の課題・改善点について、④その他・意見、であるが、ここでは、①ボランティア活動の感想・まとめから、学生たちの意見を集約し列記してみる。

活動内容で多いのは、①ベガルタ仙台の活動・9名、②聴覚障害学生へのノートテイク活動5名、③障害児・者の個別生活サポート活動5名、④障害者スポーツ活動4名、である。その他には不登校児サポート、老人クラブのレクリエーション支援、障害者施設のパンづくりなどがあげられるが、活動先を固定しないで、意識的にさまざまな活動に参加している学生が11名いる。

1 人とのふれあい、出会いの楽しさ	12名
2 自分自身の勉強、成長になった	10名
3 コミュニケーションの学びの場	6名
4 ボランティアセンターの重要性、利用して幅広く活動	5名
5 相手の笑顔と感謝の言葉が喜び	4名

6 ボランティア仲間が親切で教えてくれた (ベガルタ仙台)	4名
7 授業以外の充実感	4名
8 障害者の生きる姿勢に感銘	3名
9 将来の福祉職をめざして	2名
10 活動動範囲が広がり充実感	2名
11 活動は大変な裏側の仕事 (ベガルタ仙台)	2名
12 ノートテイクで良い経験	2名
13 自分に自信をもちたい	1名
14 授業の技術の実践	1名
15 社会に役立ちたい	1名
16 街中での車椅子の不自由さに気づく	1名
17 さまざまな地域の情報を得る	1名
18 サッカー・コミュニケーション・コーチングスキルの不足	1名
19 移動手段が自転車で遠くの活動に参加できない	1名
20 感動をもらい勇気がわいた	1名
21 お金が介在しないので人間関係が身近に	1名
22 部活との両立ができた、短期活動に参加	1名
23 卒業後もボランティア活動を続けた	1名
24 障害者も自分たちと同じ人間	1名
25 外部の研修会に参加し勉強になった	1名
26 小さな親切運動	1名
27 相手のニーズを知ることの難しさ	1名
28 心身ともに余裕が必要	1名
29 ボランティア活動の楽しさ・生きがい	1名
30 世界観が広がった	1名
31 相手との信頼関係が生まれた	1名

列記してみると多種多様である。表現の方法はさまざまであるが、殆どの学生が活動を肯定的に捉えている。なかでも、「人とのふれあい、出会いの楽しさ・12名」、「コミュニケーションの学びの場・6名」「相手の笑顔と感謝の言葉が喜び・4名」とあるように、約

半数の学生は、人とのコミュニケーションの重要性を感じ取っている。一方、「自分自身の勉強、成長になった・10名」「授業以外の充実感・4名」「将来の福祉職を目指して・2名」のように、将来の目標に向かっての学びの場と位置づけている学生も多い。

活動はよい面ばかりでなく、「大変な裏側の仕事・2名」「相手のニーズを知ることの難しさ・1名」「移動手段に困る・1名」など、今後の自分自身やボランティアセンターの活動に対する課題提起もなされている。

今後とも、レポートやアンケートの集計を積み上げて、学生に対する教育的効果などを実証していきたい。

3 まとめ・考察

- 1) ボランティアセンターは一定の準備期間を経て、予定どおりスタートが出来た。
- 2) 運営には学生スタッフとコーディネーターが当たり、月1回、ボランティアスタッフミーティングを開催し、今後の予定確認と諸課題の解決にあたっている。
- 3) ボランティア活動に参加を希望する学生は、3学科のうち健康福祉学科の学生が多く、なかでも女子学生の82.7%が希望している。
- 4) 参加しない学生の理由は、体育学科では部活動が忙しいが55.5%で一番多く、健康福祉学科ではアルバイトが38.9%、部活動が忙しいが33.3%と続く。
- 5) 学生のボランティア活動領域は、高齢者よりも障害者・児童の領域への希望が多い。
- 6) ボランティア活動の依頼先も、障害者関係からの依頼が多く、児童、高齢者へと順位は下がっていく。
- 7) 活動内容は多岐にわたるが、生活支援が35.9%、スポーツ・レクリエーションが28.2%と1・2位を占め、本学の体育学部としての特色が生かされている。
- 8) 依頼先は行政31.6%と社会福祉法人29.1

%が多いが、行政とは各町の教育委員会からで、小中学校のクラブ活動指導を含めた依頼が多く、教員志望の学生が要請に積極的に応えている。

- 9) 一定の活動先を選んで固定的に参加している学生と、さまざまな活動先に意識的に参加している学生とに2極分化の傾向がみられる。
- 10) 依頼件数184件(依頼先カ所数117カ所)、活動学生数延べ592人、地域社会から寄せられる期待と評価は高い。
- 11) 学生支援センターの一部門として位置づけられたことにより、相互協力と連携がはかれ、役割のすみわけ、特に無償・有償活動のすみわけがスムーズである。
- 12) 学内の各種クラブの活動先や介護実習先からの依頼などには、相互連携をとりつつ柔軟に対応されている。

4 今後の課題

一年間の活動を終えて、ボランティアセンターとしての今後の課題が見えてきた。基本的な課題を整理してみる。

- 1) ボランティア活動の需要と供給のアンバランス
ボランティア活動の依頼先は多く、次第に口コミで広がっている。最近では仙台市内からの依頼が増加し、仙南地域に居住する学生が多い本学の実状からは、本学の立地する仙南地域を優先したいと思う。交通費も多額を要す。ほかにも、ウィークデイの昼間の活動には学生は授業と重複し参加が難しい。土日かウィークデイも夜間の活動が望ましい。また、学生たちは単発的なイベントへの参加を希望するが、毎週1回の定期的な地道な地味な活動には希望者が少ない。全ての依頼に応えたいと思っても需要と供給がアンバランスなのである。現状では依頼件数に対してお断りせざるを得ないことが多く今後の検討を要する。

2) 学生スタッフの主体的運営のしくみと社会的責任・負担の増加

ボランティアセンターの運営に学生スタッフが主体的に関わっていて、その果たす役割は大きい。全国的な教育領域のボランティアセンターの研修会に参加し、実践の現状を積極的に発言する力量も蓄えている。学生スタッフ抜きには本学のボランティアセンターは存在しないと言っても過言ではない。今後ともその方向で進めたいと考えているが、本学へのボランティア活動の依頼件数が多い現状では、社会的責任を果たすために穴埋めしようとして、つつい学生スタッフに無理がかかっても活動に参加する現状がある。有難いことではあるが、これでは長続きしない。一般学生のボランティア活動参加人数が増加することを期待したい。参加呼びかけの工夫が必要である。

3) 広報紙「ぼらんて」の有効活用

毎月定期的にA版4ページのボランティアセンターの広報誌が学生スタッフの広報部員によって発刊されている。情報が満載で内容も充実している。ボランティアセンターの窓口において随時配布しているが、なかなか全学生の手には渡らない。あちこちにぶら下げて自由に取って欲しくても少なくなならない。学生の手には渡り身近にボランティア活動を感じてほしいとあれこれ工夫を重ねているが、約2000名の学生に毎月200部を消化するのがやっとである。有効に活用されるための工夫が求められている。

4) 一般学生に対する活動参加への動機づけと働きかけの必要性

新年度充足の全学年別オリエンテーション時に各学科学年を回り、「ボランティア活動実践」単位履修ついてカリキュラムの説明を行う。単位登録し研修講座を受けた学生が97

名、単位履修を成した学生が42名であった。1年目にして、この数値を多いとみるか、少ないとみるか、ボランティア活動の基本は自発性である。強制することではないことは当然であるが、多くの学生たちが関心を示しつつあるのに、活動に参加していない。自ら参加するのを待つだけでなく、気軽に参加するための動機づけが必要でないか。最初の一步を踏み出すための働きかけの工夫をする必要がある。

5) ボランティア活動の情報交換と学生の交流の場の設定

実際にボランティア活動に参加した学生たちのレポートから、他の参加した学生たちがどんな活動に参加し、どんな経験や思いを抱いたか知りたい、と記されていた。個々にはさまざまな活動に参加していても、相互の情報交換、横の連携が取れていない。交流を図ってこれからの自分の活動を実り多いものになりたいという。率直な鋭い問題指摘である。ぜひ、今後交流の場の設定を行いたいものである。

6) 学内の連携とネットワークの重要性

1年間ボランティアセンターの運営を重ねてきたが、学内での理解がどれだけ深まってきたか、学生の教育レベルで、また学生のクラブ活動のレベルで学内の連携が重要である。特に教員同士の連携が図られると、各個人で抱えているボランティア活動の依頼がオープンになり、学生への公募による活動への参加が図られる。この場合もボランティアセンターへの丸投げがあってもよいし、教員が持つ専門性を発揮して学生とともに参加されてもよい。産学協同がうたわれる昨今である。学内の連携とネットワークのために、教員のボランティアセンターの活用を願う次第である。

参考文献

- 1 「大学改革の進捗状況等についてーボランティア関連部分調査結果」文部省・平成9年10月 (平成16年6月1日受付,平成16年7月30日受理)
- 2 「新しい時代を拓く心を育てるために一次世代を育てる心を失う危機」中央教育審議会・平成10年6月30日
- 3 「21世紀の大学像と今後の改革方策についてー競争的環境の中で個性が輝く大学」大学審議会・平成10年10月26日
- 4 「学習の成果を幅広く生かすー生涯学習の成果を生かすための方策について・第3章学習成果をボランティア活動に生かす」生涯学習審議会・平成11年6月9日
- 5 「教育立国をめざして・3-(4)ボランティア活動の推進」教育改革プログラム第3次改定・平成11年9月21日
- 6 「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について・第2章5-(2)保護者や地域住民との連携・協力」中央教育審議会・平成15年10月7日
- 7 「ボランティア活動の中長期的な振興方策について」厚生省中央社会福祉審議会地域福祉専門部会・平成5年7月
- 8 「国民生活白書平成12年版ー第1部国民生活を豊かにするボランティア活動」経済企画庁・平成12年11月
- 9 「厚生労働白書平成15年版ー活力ある高齢者像と世代間の新たな関係の構築・4章2-7ボランティア活動への参加促進」厚生労働省・平成15年8月4日
- 10 「ボランティア学習展開事例集」一橋出版・富田恵子他編著・平成4年4月
- 11 「白いページにわたしを描くーボランティアコーディネーター読本」簡井書房・吉沢英子・富田恵子・石淵真理編著・平成10年5月20日
- 12 「地域をつなぐ福祉教育・ボランティア活動の実践。ーボランティア活動から学んだもの・学生の立場から・仙台大学／富田恵子」日本地域福祉学会第14回大会報告要旨集・平成12年6月
- 13 「地域をつなぐ福祉教育・ボランティア活動の実践」ーボランティア活動の受け入れ先の立場から・仙台大学／富田恵子・三鷹介護福祉専門学校／三上君子」日本地域福祉学会第15回大会報告要旨集・平成13年6月
- 14 「地域を結ぶ大学のボランティアセンターの創設・運営の現状ー学生の関わりを中心に・仙台大